

粘土に幼児をいざなう（3歳児）

—おせんべいになったよ！—

幼児の遊びに粘土は必須と思っていましたが、においがしたり、汚れたりすることが嫌で、案外ご家庭では使っておらず、最近では幼稚園で初めて出会う素材になっているようです。

粘土の特性は可塑性にあります。どんどん形を変えられることで、幼児のイメージも広がっていきます。

ところが、3歳児に粘土を出してみると、意外と指でちぎることや、つまんで丸めることしかしていません。そこで、先生の出番です。

先生も一緒にままごとの場に入って粘土をいじります。

手のひらでクルクルと丸めて「先生はお団子できたよ」とお皿に置きます。また粘土をとってクルクルと始めると、今度はその場にいる子ども達が先生の様子を見ています。そして中には真似をしてやってみる子もでてきます。先生と同じように出来ると表情も和らぎます。「できた！お団子」とてもうれしそうです。お次は手のひらでつぶします。「おせんべいになったよ！」と見せると、またまた同じようにたたきつぶすなどして平たくのばしていきます。「じゃ、今度はどう？」と粘土を細長く伸ばしていきます。その作業を不思議そうに眺めている子どもたち。細く長く伸びて先生の手から出てくる粘土に歓声があがります。「へび～」「チュルチュル～（ツルツル＝麺）」

えーっ、これって、先生が教え込んでるんじゃない？子どもが自由に粘土遊びできるようにするには、先生は何もしない方がよいのでは？と思われた方もいらっしゃるかもしれません。でも、初めての素材の性質を知るためには、こんな風に先生がその素材で楽しく遊ぶ様子を見せながら伝えていく必要もあるでしょう。あくまでも、「お団子を作るよ、おせんべい作るよ…」ではなく、「こんなのができちゃった」という感じが大切だと思います。長く伸びた粘土を「へび」や「麺」に見立てるのは子どもです。繰り返し遊ぶ中で、つぶした粘土はおせんべいではなく他のものにも見立てられることになるでしょう。そのことが、「自由に粘土遊びをする」ということだと思います。

粘土の可能性を遊びの中でどんどん広げていきたいですね。

粘土のかたまりがあると、どうしてもナイフで切ろうとするようです。初めのうちはこのように手指を使って様々なことができる体験をさせていきたいので、個人的には、ナイフは後出しにしたいと考えています。